

東アジアにおけるマガモとオナガガモの春の渡り

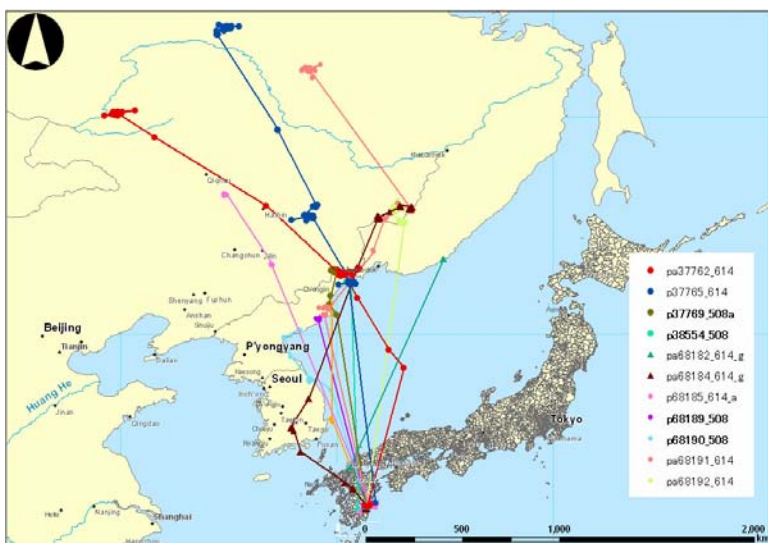
○樋口広芳¹⁾・植田睦之²⁾・高木憲太郎²⁾・藤田祐樹¹⁾・時田賢一³⁾・Jerry Hupp⁴⁾・John Pearce⁴⁾・Paul Flint⁴⁾・嶋田哲郎⁵⁾・内田聖⁶⁾・呉地正行⁷⁾・今野怜⁸⁾・奥山美和⁸⁾・渡辺ユキ⁹⁾・森下英美子¹⁰⁾・馬田勝義¹¹⁾・長雄一¹²⁾・平岡恵美子¹⁾・土方直哉¹⁾・藤田剛¹⁾

¹⁾ 東大・農、²⁾ バードリサーチ、³⁾ 我孫子市鳥の博物館、⁴⁾ USGS Alaska Science Center、⁵⁾ 伊豆沼サンクチュアリセ、⁶⁾ 里山自然史研、⁷⁾ 雁を保護する会、⁸⁾ 標識協会、⁹⁾ 阿寒国際ツルセンター、¹⁰⁾ エコ・プロデュース、¹¹⁾ 野鳥の会長崎県支部、¹²⁾ 北海道環科研

渡り鳥の移動は感染症の伝播や風力発電施設との衝突にかかわりがあるため、渡り経路の解明は緊急かつ重要な研究テーマとなっている。そこで、感染症の伝播や風車との衝突にかかわる可能性のあるカモ類を対象に、国内および国外の移動経路を明らかにすることを目的として衛星追跡を行なった。本講演ではマガモとオナガガモに焦点をあて、春の渡りの概要について報告する。

2006年11月から07年3月にかけて、北海道帯広市帯広川、宮城県伊豆沼、埼玉県越谷市、長崎県佐世保市、宮崎県宮崎市でマガモ合計49羽とオナガガモ合計40羽に衛星用の送信機を装着し、春の渡りを追跡した。使用した送信機は米国製で重量12~30g、太陽電池方式である。帯広、伊豆沼、越谷を出発したオナガガモは、北上して北海道から多くはオホーツク海を越えてカムチャツカ方面へ、ほかのものはサハリンへと移動した。その後、どちらも大陸東北部に到達し、そこで繁殖したと思われる。帯広のマガモは、北千島方面に移動したもののほか、一部は北海道内にとどまった。越谷のマガモは、本州中部あるいは北海道から日本海を越えてロシアの南東部へと移動した。佐世保および宮崎のマガモは、多くが朝鮮半島を経由せずに、日本海を越えて北朝鮮の東北部や中国の東北部に直接移動し、その後、一部のものはロシアの南東部に渡った（下図参照）。少数個体は朝鮮半島に入り、その後、北上してロシアの南東部などに移動した。

総じて、オナガガモはマガモに比べて繁殖地までの移動距離が長かった。両種とも、とくにマガモは、渡りの経路が個体によってかなり異なり、アジア東北部に広く散らばる傾向があった。日本で越冬するこれらのカモ類は、東アジアのかなり広範囲の地域から渡来していると思われる。



宮崎市から追跡したマガモの春の渡り経路